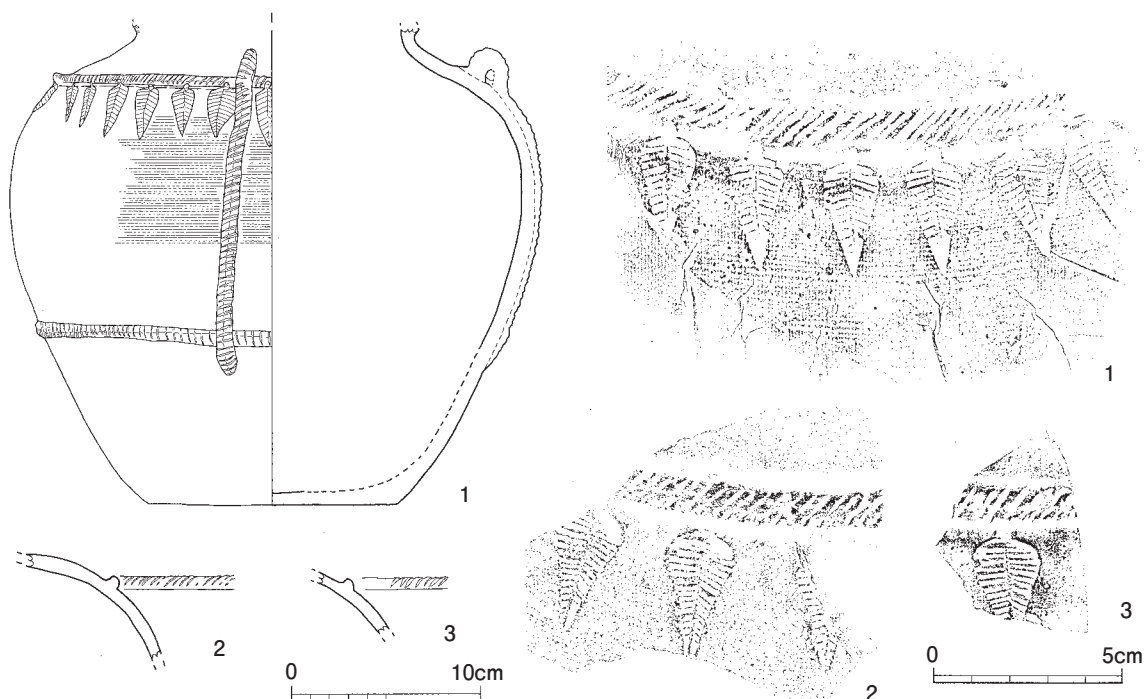


師器として焼成されたものであると言える。

須恵器の樽形甕は、京築地域内では、管見の限り同じ東九州自動車道建設に伴い調査を行った「宝山桑ノ木遺跡Ⅲ区」のピットでのみ見られ(小川編 2014)、本遺跡では、現在の所確認されていない。これらのことから現段階では、地域内では広く流通しているとは言いがたく、物の流入よりも、人の流入、つまり製作者・技術の流入の可能性が高いとおきたい。

## 6 木の葉文スタンプ付須恵器について

Ⅱ-3区で木の葉文スタンプ付の須恵器が2点出土した。溝及び住居跡からの出土ではあるが、出土距離は近く同一個体と考えられる。木の葉文は豊前市四郎丸窯跡出土坯の口縁部下に押されており、その他にも豊前市荒堀雨久保遺跡出土須恵器、上毛町垂水廃寺、友枝瓦窯跡出土瓦でも確認されている。第213図1は、荒堀雨久保遺跡出土壺、2・3は本遺跡出土例である。葉の形態は、幅が僅かに本遺跡出土例が大きく、やや下膨れした形態となり、差異が認められる。しかしながら葉脈の表現・突帯及び木の葉文の位置、スタンプの間隔など、類似する点が多く、本遺跡出土例も類似の壺であり、また同じ窯で製作されたものである可能性が高い。先に述べたように、本遺跡以外では基本的には豊前市～上毛町を中心として出土しており、管見の限りでは本遺跡が北限で、しかも飛び地的に確認されたこととなろう。しかしながら、この遺物以外には豊前地域との関係性は明らかではなく、行橋市域まで分布圈があったのか、本遺跡にのみ特別な事情で搬入されたのかなどのについては、類例の増加を待って判断する必要がある。



第213図 木の葉文スタンプ付須恵器壺(1/4、拓本は1/2)

1：荒堀雨久保遺跡、2・3：延永ヤヨミ園遺跡